

熊本県導入指針
(持続性の高い農業生産方式の導入に関する指針)

第1 導入すべき持続性の高い農業生産方式の内容

1 普通作

水稻・麦・大豆における土づくりについては、稲ワラ、麦稈の土壌還元を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。施肥については、側条施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病害虫発生予察に基づいた適期防除による農薬使用量の低減を基本とするが、さらに低減を図るために生物農薬、フェロモン剤利用技術及び雑草防除技術等を導入する。

(1) 水稻

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み (省令) 稲麦作付け体系の場合、稲ワラ、麦稈の全量、水稻単作の場合は、稲ワラ全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、秋冬期に2回以上の耕起を実施する。麦稈の施用田は還元状態を避けるため、水管理を徹底する。 3 レンゲ・ナタネ等の緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。鋤込み量に応じた基肥削減や適切な水管理など緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 1.0 t/10a以上 稲ワラ全量鋤込み (秋冬期耕起2回以上) 麦稈全量鋤込み 緑肥全量鋤込み (水稻移植14日以前)
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 側条施肥技術 (省令) 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 コシヒカリ 6 (7) ヒノヒカリ他 7 (8)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫殺菌剤1回削減 除草剤1回削減 殺虫剤1回削減 除草剤1回削減 殺菌剤1回削減 除草剤1回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 温湯種子消毒技術 (省令) 2 機械除草技術 (省令) 3 除草用動物利用技術 (省令) (アイガモ、コイの利用) 4 生物農薬利用技術 (省令) 5 マルチ (紙マルチ) 栽培技術 	病害、線虫 雑草 害虫 雑草 病害 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病害虫」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(2) 麦

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 稲ワラ、麦稈の全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、麦の播種前に2回以上の耕起を実施する。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （ただし、作付け体系内における年間投入量） 稲ワラ全量鋤込み （作付け前耕起2回以上） 麦稈全量鋤込み
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による基肥重点の施肥を行う。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 大麦 5（6） 小麦 8（9）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺菌剤 1回削減 除草剤 1回削減
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令）	病害 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(3) 大豆

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 1 t/10a以上 （ただし、作付け体系内における年間投入量）
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1. 4 kg/10a以下 （1. 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1回削減 殺菌剤 1回削減 殺虫剤 1回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 ハスモンヨトウ ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(4) アワ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥設計とする。 		化学肥料由来窒素成分量 3. 5 kg/10a以下
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術		除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令）	対象病害虫名 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(5) ソバ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥設計とする。 		化学肥料由来窒素成分量 2. 1 kg/10a以下
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術		除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 	対象病害虫名 雑草 ハスモンヨトウ 線虫類	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(6) はとむぎ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 側条施肥技術（省令） 基肥として側条施肥を導入。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 0 kg/10a以下 （1 2 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令）	雑草 害虫 アワノメイガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病害虫」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

2 野菜

野菜における土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害の発消長に基づいて防除を行うことを基本とし、その際に天敵、フェロモン剤、対抗植物、被覆栽培、マルチ栽培及び機械除草技術を導入して低減を図る。

(7) トマト

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 促成 2 1 （2 4） 夏秋雨よけ 2 1 （2 4） 加温抑制 1 4 （1 6） 無加温抑制 1 4 （1 6）
	（県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 ②台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令）	コナジラミ 灰色かび病 コナジラミ、ハメグリハエ 鱗翅目害虫、ネオブセンチュウ 線虫類 土壌病害、線虫類、 葉かび病 土壌病害、線虫類 コナジラミ、ハメグリハエ、 鱗翅目害虫 病害、コナジラミ、ハメグリハエ、 鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ	
	（県独自技術） 9 マルハナバチ利用技術（県） 10 循環ファン利用技術（県）		（別添一覧表） （別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(8) ミニトマト

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 <p>（県独自技術）</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 灌水同時施肥技術（県） 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>促成 2 5 (2 8)</p> <p>夏秋雨よけ 2 1 (2 4)</p> <p>抑制無加温 2 1 (2 4)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 ②台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>コナジラミ 灰色かび病 コナジラミ、ハモグリバエ 鱗翅目害虫、ネオブセンチュウ 線虫類 土壌病害、線虫類、 葉かび病、斑点病</p> <p>土壌病害、線虫類</p> <p>コナジラミ、ハモグリバエ、 鱗翅目害虫</p> <p>病害、コナジラミ、ハモグリバエ、 鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ</p>	
	<p>（県独自技術）</p> <ol style="list-style-type: none"> 9 マルハナバチ利用技術（県） 10 循環ファン利用技術（県） 	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(9) なす

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 促成 標準収量 44 （15 t 未満）（50） 多収 57 （15 t 以上）（65） 夏秋露地 35（40） 早熟 32（36） 抑制 28（32）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令）	コナジラミ、スリップス 灰色かび病、ハダニ、スリップス、鱗翅目害虫 線虫類 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コナジラミ、スリップス、ハモグリハエ 病害、コナジラミ、ハモグリハエ、鱗翅目害虫 ハスモンヨトウ	
（県独自技術） 9 マルハナバチ利用技術（県） 10 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(10) ピーマン (カラーピーマン含む)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み (省令) 堆肥などの有機物と数kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 (県独自技術) 4 灌水同時施肥技術 (県)		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 促成 35 (40) 夏秋露地 26 (30) 抑制 21 (24)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 対抗植物利用技術 (省令) 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術 (省令) ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術 (省令) ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術 (省令) ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術 (省令) (県独自技術) 9 循環ファン利用技術 (県)	対象病害虫名 コジラミ、スリップス スリップス、ハモンヨトウ 線虫類 土壌病害、線虫類 土壌病害、線虫類 コジラミ、スリップス 病害、コジラミ、スリップス、鱗翅目害虫 ハモンヨトウ (別添一覧表)	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 (別添一覧表)
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(11) シシトウガラシ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a以下 (23 kg/10a以下)</p>
	<p>(県独自技術)</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 灌水同時施肥技術（県） 		
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	<p>殺虫剤 1回削減 殺虫剤 2回削減 殺線虫剤 1回削減 土壌消毒 1回削減</p> <p>殺虫剤 1回削減</p> <p>殺菌剤 2回削減 殺虫剤 2回削減 殺虫剤 1回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>コナジラミ スリップス、ハスモンヨトウ 線虫類 線虫類</p> <p>スリップス</p> <p>病害 害虫 ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(12) きゅうり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。	化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 促成 28 （32） 半促成 20 （22） 夏秋雨よけ・高原露地 32 （36） 抑制加温 20 （22） 抑制無加温 20 （22）	
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 ②台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 7 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 8 フェロモン剤利用技術（省令）	対象病害虫名 コナジラミ、スリップス 灰色かび病、 ハダニ、スリップス 線虫類 病害、つる割病 線虫類 コナジラミ、スリップス、ハモグリバエ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	殺虫剤 1回削減 殺菌剤 2回削減 殺虫剤 2回削減 殺線虫剤 1回削減 殺菌剤 1回削減 土壌消毒 1回削減 殺虫剤 1回削減 殺菌剤 2回削減 殺虫剤 2回削減 殺虫剤 1回削減
	（県独自技術） 9 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(13) にがうり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安								
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>								
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 <p>（県独自技術）</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 灌水同時施肥技術（県） 		<p>化学肥料由来窒素成分量</p> <table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="text-align: center;">半促成</td> <td style="text-align: center;">3 7</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">(4 2)</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">夏秋</td> <td style="text-align: center;">3 2</td> </tr> <tr> <td></td> <td style="text-align: center;">(3 6)</td> </tr> </table>	半促成	3 7		(4 2)	夏秋	3 2		(3 6)
半促成	3 7										
	(4 2)										
夏秋	3 2										
	(3 6)										
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 土壌消毒 1 回削減</p> <p>殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p>								
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>害虫 ハスモンヨトリ、オオタバコガ 線虫類</p> <p>コナジラミ、スリップス、アブラムシ</p> <p>病害 害虫 ハスモンヨトリ、オオタバコガ</p>									
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 										

(14) かぼちゃ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 半促成 1 6 (1 8) 早熟 1 3 (1 4)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術	害虫 雑草 ネコブセンチュウ 線虫類 線虫類 コナジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 コナジラミ、アブラムシ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病虫害」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(15) ズッキーニ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a以下 (1.7 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗性植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 	<p>害虫 雑草 鱗翅目害虫 線虫類 線虫類</p> <p>コナジラミ、スリップス、アブラムシ</p> <p>病害 害虫</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、「対象病虫害」が雑草の場合ほ場内の機械除草、害虫の場合ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(16) すいか (小玉すいか含む)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み (省令) 堆肥などの有機物と数kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 促成・半促成 1 4 (1 6) 抑制 1 4 (1 6) 早熟 1 4 (1 6) 小玉スイカ 1 0 (1 1)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回以上削減 殺虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減
	1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 対抗植物利用技術 (省令) 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術 (省令) ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術 (省令) ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 (育苗) 7 被覆栽培技術 (省令) ①トンネル栽培技術 ②防虫ネット利用技術	コナジラミ、スリップス 鱗翅目害虫、アブラムシ類、ハダニ類 ネコブセンチュウ つる割病 線虫類 コナジラミ、スリップス、アブラムシ 病害 害虫	
	(県独自技術) 8 循環ファン利用技術 (県)	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(17) メロン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>キンショウ・プリンズ 1 2 (1 4)</p> <p>ホームラン 7 (8)</p> <p>アデス・アムス 9 (1 0)</p> <p>赤肉半促成 9 (1 0)</p> <p>アールス 1 1 (1 2)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 ②台木利用技術 5 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 6 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術（育苗） 7 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 	<p>コジラミ、スリップス 鱗翅目害虫、コジラミ類、ミナキイロアザミマ、アブラムシ類 ネコブセンチュウ 土壌病害</p> <p>線虫類</p> <p>コジラミ、スリップス、ハモグリハエ</p> <p>害虫</p>	
	(県独自技術)	(別添一覧表)	
	8 循環ファン利用技術（県）	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(18) いちご

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1.7 kg/10a以下 （1.9 kg/10a以下）
	（県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 3 回以上削減 殺虫剤 3 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術（育苗） ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	スリップス 灰色かび病、うどんこ病、炭疽病、ハスモンヨトリ、ハダニ類、アブラムシ類、スリップス類 線虫類 スリップス 害虫 病害 ハスモンヨトリ	
	（県独自技術） 7 循環ファン利用技術（県）		（別添一覧表） （別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 化学農薬使用量低減技術の被覆栽培技術は、施設開口部の防虫網設置と育苗期の雨よけ被覆とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(19) いんげん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>促成 2 8 (3 2)</p> <p>半促成 2 3 (2 6)</p> <p>トンネル早熟 1 6 (1 8)</p> <p>抑制・露地秋作 1 6 (1 8)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ハダニ 灰色かび病 ネコブセンチュウ スリップス、アブラムシ</p> <p>病害 病害 害虫 ハスモンヨトウ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(20) そらまめ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>ハウス・トンネル 1 3 (1 4)</p> <p>路地 1 0 (1 1)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 	<p>雑草 ヨトウムシ類 アブラムシ</p> <p>病害</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(21) エンドウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 夏まきハウス 2 5 (2 8) 秋まき 1 2 (1 4)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令）	雑草 シロイモシヨトウ スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(22) スナップエンドウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a以下 (23 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1回削減 殺虫剤 1回削減 殺虫剤 1回削減</p> <p>殺菌剤 1回削減 殺虫剤 1回削減 殺虫剤 1回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 シロイモシヨトウ スリップス、アブラムシ</p> <p>病害 害虫 ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(23) オクラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2 2 kg/10a以下 (2 5 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 	<p>害虫 鱗翅目害虫 ネコブセンチュウ スリップス、アブラムシ</p> <p>病害 アブラムシ、鱗翅目害虫</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(24) スイートコーン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2.5 kg/10a以下 (2.8 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②黄色蛍光灯利用技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 	<p>雑草 鱗翅目害虫</p> <p>アブラムシ 鱗翅目害虫[*] アブラムシ</p> <p>病害 害虫</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(25) ブロッコリー、カリフラワー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2 2 kg/10a以下 （2 6 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>雑草 ハスモンヨトウ</p> <p>病害 アブラムシ</p> <p>害虫 ハスモンヨトウ、コナガ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(26) キャベツ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥の施用や作物残渣の土壌還元を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>高原春まき 17 (19)</p> <p>高原夏まき 17 (19)</p> <p>平坦地夏まき 17 (19)</p> <p>平坦地秋まき 17 (19)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 軟腐病 鱗翅目害虫 病害</p> <p>アブラムシ</p> <p>コナガ、モンシロチョウ コナガ、オオタバコガ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(27) はくさい

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥の施用や作物残渣の土壌還元を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 春～秋まき 1 4 (1 6) 冬まき 1 8 (2 0)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	雑草 軟腐病 鱗翅目害虫 根こぶ病 アブラムシ 病害 コナガ、モンシロチョウ コナガ・オオタマコナガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(28) チンゲンサイ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥の施用や作物残渣の土壌還元を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>秋・冬まき 1 4（1 6）</p> <p>春・夏まき 1 3（1 4）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培利用技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>害虫 コナガ 病害</p> <p>線虫類</p> <p>害虫</p> <p>病害 病害 害虫 ハスモンヨトリ、コナガ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(29) コマツナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 8 kg/10a以下 （10 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 コナガ 害虫</p> <p>線虫類 ハメグリハエ類</p> <p>害虫</p> <p>病害 病害 害虫 ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(30) タカナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 (1 6 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 鱗翅目害虫 アブラムシ</p> <p>害虫 ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(31) 阿蘇タカナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 6 Kg/10a以下 （7 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	<p>除草剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 	<p>雑草 線虫類 アブラムシ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(32) ナバナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a以下 (1.7 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1回削減 殺虫剤 1回削減 殺虫剤 1回削減</p> <p>殺虫剤 1回削減 殺虫剤 1回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 鱗翅目害虫 スリップス、アブラムシ</p> <p>害虫 ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(33) ノザワナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1.5 kg/10a以下 (1.7 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>除草剤 1回削減 殺虫剤 2回削減 殺虫剤 1回削減</p> <p>殺虫剤 1回削減 殺虫剤 1回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 鱗翅目害虫 スリップス、アブラムシ</p> <p>害虫 ヨトウムシ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(34) クレソン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 8 kg/10a以下 （9 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	害虫 鱗翅目害虫 アブラムシ 病害 害虫 コナガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(35) ほうれんそう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥の施用や作物残渣の土壌還元を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 平坦露地栽培 9月まき 8 (10) 10月まき 14 (16) 11月まき 18 (20) 雨よけ栽培 14 (16)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 病害 線虫等 スリップス、アブラムシ 病害 害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
	(県独自技術) 9 移植栽培技術（県）	(別添一覧表)	(別添一覧表)
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(36) レタス、非結球レタス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥の施用や作物残渣の土壌還元を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>平坦地夏まき 1 4 (1 6)</p> <p>秋まき 年内穫り 1 4 (1 6)</p> <p>年明穫り 1 8 (2 1)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②黄色蛍光灯利用技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 4 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 鱗翅目害虫</p> <p>アブラムシ 鱗翅目害虫 アブラムシ</p> <p>病害 細菌性病害 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(37) しゅんぎく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2 1 kg/10a以下 （2 4 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>害虫 ハスモンヨトウ 線虫類 ハメグリハエ類</p> <p>害虫</p> <p>べと病、ハメグリハエ類、アブラムシ類</p> <p>ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(38) パセリ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2.8 kg/10a以下 （3.2 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ハスモンヨトウ ネコブセンチュウ</p> <p>アブラムシ</p> <p>病害 虫害 ハスモンヨトウ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(39) セリ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a以下 (1 2 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 3 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 	<p>害虫 アブラムシ、スリップス</p> <p>病害 害虫</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(40) アスパラガス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 35 kg/10a以下 （40 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 害虫 病害 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(41) たまねぎ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>早出し 13（14） 普通 14（16）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	<p>雑草 軟腐病 スリップス</p> <p>害虫</p> <p>シロイモシヨトリ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(42) ねぎ (葉ねぎ、深ねぎ、小ねぎ)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み (省令) 堆肥などの有機物と数kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術 (省令) 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>葉ネギ、深ネギ 17 (19)</p> <p>小ネギ 18 (20)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 熱利用土壌消毒技術 (省令) <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術 (省令) <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術 (省令) <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②トンネル栽培技術 ③防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術 (省令) 7 マルチ栽培技術 (省令) 	<p>害虫 シロイモシヨトリ 線虫類 ネダニ・コナダニ類</p> <p>アブラムシ類、スリップス類、ハモグリハエ類</p> <p>疫病、べと病等 スリップス類 害虫 鱗翅目害虫 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(43) ワケギ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2.1 kg/10a以下 （2.4 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 シロイモシヨトウ 線虫類 ネダニ・コナダニ類</p> <p>アブラムシ類、スリップス類、ハメグリハエ類</p> <p>病害 害虫 シロイモシヨトウ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(44) ニラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下</p> <p>播種～1回目 25 (28)</p> <p>収穫2回目以降 3 (3)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ヨウムシ類 線虫類 ネグニコナダニ類</p> <p>アブラムシ類、スリップス類、ハモグリバエ類</p> <p>病害 害虫 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(45) だいこん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 1 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 高原 10 (11) 平坦地 11 (12)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 ②防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	害虫 軟腐病 コナガ、アオムシ ネグサレセンチュウ 萎黄病 害虫 病害 害虫 コナガ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(46) にんじん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 夏まき 1 1 (1 2) 冬まき 1 1 (1 2) トンネル 1 1 (1 2)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ハスモンヨトリ 線虫類 アブラムシ 病害 ハスモンヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(47) ごぼう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 1 3 kg/10a以下 （1 4 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 4 マルチ栽培技術 	害虫 線虫類 病害 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(48) さといも

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 ハウス・トンネル早掘り 1 3 (1 4) マルチ早掘り 1 4 (1 6) 普通掘り 1 3 (1 5)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハスモンヨトウ 線虫類 病害 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(49) ばれいしょ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 春バレイショ 14 (16) 秋バレイショ 11 (12)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	雑草 軟腐病 線虫類 病害 アブラムシ 病害 ハスモンヨトリ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(50) かんしょ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 1 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a以下 （4 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 抵抗性品種栽培・台木利用技術 ①抵抗性品種栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	害虫 ネコブセンチュウ コガネムシ幼虫 ネコブセンチュウ 線虫類 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(51) レンコン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 ハウス 14 (16) トンネル 18 (20)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 病害 害虫 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(52) しょうが

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 ハウス・トンネル 20 （22） 露地 22 （26）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 病害 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量 		

(53) ミョウガ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を削減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a以下 （5 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 4 フェロモン剤利用技術（省令） 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 病害 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(54) コンニャク

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 1 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料施用量の低減技術	1 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥設計とする。		化学肥料由来窒素成分量 10 kg/10a以下
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令）	雑草 線虫類 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 		

(55) ナガイモ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2.8 kg/10a以下 （3.2 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	<p>除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減</p> <p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	<p>雑草 シロイモシヨトリ 線虫類</p> <p>アブラムシ類 ハスモンヨトリ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(56) サンショウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥1.5t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （成木園） 10kg/10a以下 （11kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 マルチ栽培技術（省令）	雑草 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(57) シソ (オオバ)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み (省令) 堆肥などの有機物と数kg (成分) の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術 (省令) 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2.5 kg/10a以下 (2.8 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 熱利用土壌消毒技術 (省令) ①太陽熱利用土壌消毒技術 4 光利用技術 (省令) ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術 (省令) ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術 (省令) 7 マルチ栽培技術 (省令) 	<p>害虫 ハスモンヨトウ</p> <p>線虫類</p> <p>アブラムシ類 アブラムシ類 ハスモンヨトウ アブラムシ類</p> <p>菌核病、斑点病 アブラムシ類、アザミマメ類</p> <p>ハスモンヨトウ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(58) カブ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 2 kg/10a以下 （1 3 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①トンネル栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 軟腐病、ハスモンヨトウ等 線虫類 害虫 病害 アブラムシ類 ハメグリハエ類 ハスモンヨトウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(59) 茎ブロッコリー（スティックセニョール）

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 2 1 kg/10a以下 (2 4 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>雑草 ハスモンヨトウ</p> <p>根こぶ病</p> <p>アブラムシ類 アブラムシ類 アブラムシ類</p> <p>べと病 アブラムシ類、キスジノミハムシ ハスモンヨトウ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(60) セルリー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 基肥の植穴施用や溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 28 kg/10a以下 （32 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ハスモンヨトウ</p> <p>萎黄病、線虫類</p> <p>アブラムシ類 ハメグリハエ類 ハメグリハエ類</p> <p>葉枯病、斑点病等 アブラムシ類 ハスモンヨトウ、オタハコガ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(61) トウガラシ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a以下 (1 2 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 ④紫外線除去フィルム利用技術 6 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 	<p>コナジラミ スリップス、ハスモンヨトリ 線虫類 線虫類</p> <p>スリップス</p> <p>葉枯病、斑点病 アブラムシ類 ハモグリハエ類 ハスモンヨトリ</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(62) にんにく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 (1 6 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ネグコガ</p> <p>紅色根腐病、線虫類</p> <p>アブラムシ類 ハスモンヨトウ、オタハコガ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(63) ふき

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 ハウス促成 35（40） 露地 13（15）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令）	害虫 ハスモンヨトウ 白絹病 アブラムシ類 葉枯病 アブラムシ類 ハスモンヨトウ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(64) ベビーリーフ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 4 kg/10a以下 （4 kg/10a以下）</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	<p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減</p> <p>殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減</p> <p>殺菌剤 2 回削減 殺菌剤 2 回削減</p>
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 太陽熱利用土壌消毒技術 ② 熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 反射資材利用技術 ② 色彩粘着トラップ技術 ③ 黄色蛍光灯利用技術 ④ 紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ① 雨よけ栽培技術 ② 防虫ネット利用技術 	<p>害虫 鱗翅目害虫 土壌病害</p> <p>害虫 害虫 鱗翅目害虫 害虫</p> <p>斑点性病害等 アブラムシ類、コナガ等</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(65) ミズナ・ミブナ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラ・麦稈の鋤込み（省令） 堆肥などの有機物と数kg（成分）の窒素肥料と石灰質資材を入れて、よく混和する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ・麦稈 1 t/10a</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1.7 kg/10a以下 (2.0 kg/10a以下)</p>
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③紫外線除去フィルム利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ヨウムシ類</p> <p>立枯病等</p> <p>アブラムシ類 ハメグリハエ類、アブラムシ類 ハメグリハエ類、アブラムシ類</p> <p>尻腐病、白さび病 アブラムシ類、キスジノミハムシ コナガ 雑草</p>	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

3 果樹

果樹における土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラ等の敷料の土壌還元、草生栽培の導入等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病害虫発生予察に基づいて適期防除を行い、農薬の使用量を低減することを基本とするが、さらに低減を図るために天敵利用、フェロモン剤利用、被覆栽培、マルチ栽培技術および機械除草技術等を導入する。

(66) 温州みかん

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 3 t 1 4 (1 6) 4 t 1 7 (1 9) 5 t 1 9 (2 2)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 5 マルチ栽培技術（省令） 	雑草 カミキリムシ 病害 害虫 チャノキイロアザミウマ、カメモシ類 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(67) 甘夏、スイートスプリング、はっさく

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 3 t 1 9 (2 2) 4 t 2 1 (2 4) 5 t 2 2 (2 5)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(68) 不知火 (デコボン)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元 (省令) 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 3 t 20 (22) 4 t 22 (26) 5 t 25 (29)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2回削減 殺虫剤 1回削減 殺菌剤 3回削減 殺虫剤 2回削減 除草剤 2回削減
	1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 被覆栽培技術 (省令) ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術 (省令)	雑草 カミキリムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(69) 河内晩柑、清見、津の香

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 2 t 17 (19) 3 t 19 (22) 4 t 21 (24) 5 t 22 (26)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2回削減 殺虫剤 1回削減 除草剤 2回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(70) 大橋 (パール柑)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元 (省令) 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。(水田転換園等) 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 2 t 1 8 (2 1) 3 t 2 1 (2 4) 4 t 2 4 (2 7) 5 t 2 6 (3 0)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術 (省令) 2 生物農薬利用技術 (省令) 3 マルチ栽培技術 (省令)	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(71) ポンカン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 2 t 1 3 (1 4) 3 t 1 5 (1 8) 4 t 1 8 (2 1)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(72) ネーブル

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 2 t 2 0 (2 2) 3 t 2 2 (2 6) 4 t 2 5 (2 9)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術		除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	対象病虫害名	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(73) 晩白柚

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 予想収量 2 t 1 8 (2 1) 3 t 2 1 (2 4)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(74) ユズ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （成木目標収量 3 t/10a） 1 5 kg/10a以下 （1 7 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(75) キンカン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量（成木園） 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 3 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 2 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(76) レモン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （成木目標収量 4 t/10a） 20 kg/10a以下 （23 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2回削減 殺虫剤 1回削減 殺菌剤 3回削減 殺虫剤 2回削減 除草剤 2回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 カミキリムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(77) その他中晩柑（文旦、はるか、シークワサー、ライム）

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 高うね栽培等における根圏への施肥により施肥量を軽減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 文旦 2 1 kg/10a以下 （2 4 kg/10a以下） はるか、シークワサー、ライム 2 0 kg/10a以下 （2 2 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 2 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 マルチ栽培技術（省令） 	雑草 カミキリムシ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(78) なし

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 幸水・豊水 成木収量 3 t 16 (18) 新高・二十世紀 成木収量 5 t 20 (22)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②袋かけ栽培技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハマキムシ類 吸蛾類、カミムシ類 病害 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(79) くり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 0.4 t） 1 1 kg/10a以下 （1.3 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 マルチ栽培技術（省令）	雑草 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(80) ぶどう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 1.3 t/10a） 6 kg/10a以下 （6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②袋かけ栽培技術 4 フェロモン利用技術（省令） 5 マルチ栽培技術（省令）	雑草 灰色かび病 ハダニ類 病害 ハマキムシ類 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(81) ブルーベリー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		有機質資材0.5t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 6 kg/10a以下 （7 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 除草剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 生物農薬利用技術（省令） 2 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 3 マルチ栽培技術（省令） 4 機械除草技術（省令）	コガネムシ幼虫 病害 害虫 雑草 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(82) かき

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2.5 t） 16 kg/10a以下 （18 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 防虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令） 	雑草 カキノハタムシガ チャハネアカメムシ 病害 害虫 ヒメコスジハ チャハマキ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(83) もも、すもも

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2 t） 8 kg/10a以下 （10 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 フェロモン利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	雑草 モモンクイガ 吸蛾類 病害 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(84) うめ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 （目標収量 2 t） 1 3 kg/10a以下 （1 4 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 フェロモン剤利用技術（省令） 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ハマキムシ類、ケムシ類 コスカシハ [*] 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(85) イチジク

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 5 kg/10a以下 （6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	除草剤 1 回削減 殺線虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	雑草 ネコブセンチュウ カミキリムシ 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(86) マンゴー

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 草生利用による有機物還元（省令） 各種草生の有効利用により、有機物還元効果と土壌物理性改善を図る。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 草生全量土壌還元
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数削減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	除草剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺菌剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 除草剤 1 回削減
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令） 	雑草 スリップス、ハマキムシ類 灰色かび病 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

4 花き

花きにおける土づくりについては、土壌診断を基本として、堆きゅう肥の施用や緑肥作物の栽培等によって地力を維持・増進する。

施肥については、局所施肥や緩効性肥料により施肥効率を高めることや、有機質肥料を使用することで化学肥料使用量の低減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病害虫の発消長に基づいて防除を行うことを基本とし、その際に天敵利用、フェロモン剤利用、被覆栽培技術およびマルチ栽培技術等を導入して低減を図る。

(87) カーネーション

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安	
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 冬春 4 2 (4 8) 夏秋 2 9 (3 4)	
	（県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）			
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名		
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	害虫 ハダニ類 線虫類 スリップス スリップス 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 2 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減	
	（県独自技術） 8 循環ファン利用技術（県）		（別添一覧表）	（別添一覧表）
	・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。			

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 夏秋 17 （19） 冬春 20 （22）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 6 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 7 フェロモン剤利用技術（省令） 8 マルチ栽培技術（省令）	雑草 鱗翅目害虫 ネグサレセンチュウ 線虫類 アブラムシ類等 白さび病他 鱗翅目害虫 ハスモンヨトリ 雑草	
	（県独自技術） 9 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

(89) キンギョソウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術の導入（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料の施用（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料の施用（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術の導入		化学肥料由来窒素成分量 1 8 kg/10a以下 （2 0 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	害虫 病害 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	（県独自技術） 7 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(90) 宿根かすみそう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a以下 （1 3 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	害虫 線虫類 アザミヤ、アブラムシ ハモグリバエ類 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	（県独自技術） 7 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(91) スターチス (シュクコンスターチス)

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入 (省令) 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術 (省令) 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 (土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する) 緑肥全量鋤込み (鋤込む時期に応じた生育量を確保する)
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術 (省令) 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術 (省令) 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術 (省令) 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 (県独自技術) 4 灌水同時施肥技術 (県)		化学肥料由来窒素成分量 6 kg/10a以下 (7 kg/10a以下) (シュクコンスターチス) 2.8 kg/10a以下 (3.2 kg/10a以下)
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術 (省令) 2 熱利用土壌消毒技術 (省令) ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術 (省令) ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術 (省令) ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術 (省令) 6 マルチ栽培技術 (省令)	害虫 線虫類 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	(県独自技術) 7 循環ファン利用技術 (県)	(別添一覧表)	(別添一覧表)
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥 (牛ふん尿) の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の () 内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺 (畦畔) の機械除草を示す。 		

(92) ストック

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安	
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）	
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術の導入（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料の施用（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料の施用（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 6 kg/10a以下 （1 8 kg/10a以下）	
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名		
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 病害 アブラムシ アブラムシ 害虫 鱗翅目害虫 雑草		
	（県独自技術） 8 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）		（別添一覧表）
	その他の留意事項 ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。			

(93) デルフィニウム

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	害虫 線虫類 アブラムシ アブラムシ 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	（県独自技術） 7 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(94) トルコギキョウ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 年内早出し 1 4 （1 6） 春出し 1 1 （1 2） 無加温 1 1 （1 2） 夏秋切り 1 4 （1 6）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 ネコセンチュウ 線虫類、土壌病害 アブラムシ類 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 雑草	
	（県独自技術） 8 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(95) バラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥や稲ワラ、野草等の粗大有機物を施用する。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 粗大有機物 乾物重 500kg/10a以上
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術の導入（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料の施用（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料の施用（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 加温式土耕栽培 3.5 (4.0) ロックウール耕 NO ₃ -N, NH ₄ -N成分の 合計 6.6me以下
	(県独自技術) 4 灌水同時施肥技術の導入（県）		
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術 7 マルチ栽培技術（省令）	害虫 根頭がんしゅ病 線虫類 アザミヤ、アブラムシ ハモンヨトリ ハモンヨトリ 害虫 ハモンヨトリ 雑草	
	(県独自技術) 8 循環ファン利用技術（県）	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(96) ゆり

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 kg/10a以下 オリエンタル 1 1 （1 2） スカシユリ 1 1 （1 2） テッポウユリ 1 1 （1 2） シンテッポウユリ 2 7 （3 1）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	害虫 線虫類 アブラムシ アブラムシ 害虫、病害 雑草	
	（県独自技術） 6 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(97) グラジオラス

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 切り花 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下） 球根養成 1 8 kg/10a以下 （2 0 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 温湯種子消毒技術（省令） 2 機械除草技術（省令） 3 対抗植物利用技術（省令） 4 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 5 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 6 フェロモン剤利用技術 7 マルチ栽培技術（省令）	ネダニ類 害虫 線虫類 病害 アザミマ アザミマ シロイモシヨウ 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(98) レザーリーフファン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）
化学肥料施用量の低減技術	1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 1 kg/10a以下 （1 3 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	殺虫剤 1 回削減 土壌消毒 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 3 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 4 マルチ栽培技術（省令）	害虫 病害 害虫 雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 ・その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(99) ガーベラ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 （県独自技術） 4 灌水同時施肥技術（県）		化学肥料由来窒素成分量 20 kg/10a以下 （23 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術 6 マルチ栽培技術（省令）	害虫 線虫類 アザミヤ、コナジラミ 害虫 害虫 害虫 ハスモンヨトウ 雑草	
	（県独自技術） 7 循環ファン利用技術（県）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(100) りんどう

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 溝施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	1 機械除草技術（省令） 2 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 3 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 4 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 5 マルチ栽培技術（省令）	害虫 病害 アザミヤ アザミヤ 病害 害虫 害虫、雑草	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> 堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(101) シクラメン

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断と堆きゅう肥等の投入（省令） 鉢土については、窒素等の成分内容の明らかなもので、良質有機物を十分に含むものを使用する。		鉢土 ・窒素等の成分分析値が明らかであるもの。 ・良質有機物を2割以上含むもの。
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥設計とする。		鉢土・施設の外に施肥の影響がないようにする。
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術	害虫 ハダニ類 線虫類 アザミマ アザミマ 鱗翅目害虫 病害 害虫	
	(県独自技術) 6 循環ファン利用技術（県）	(別添一覧表)	
その他の留意事項	・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。		

(102) ホオズキ

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 1 4 kg/10a以下 （1 6 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 ③黄色蛍光灯利用技術 5 被覆栽培技術（省令） <ol style="list-style-type: none"> ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	害虫 ネオブセンチュウ 線虫類 アザミヤ アブラムシ類、鱗翅目害虫 アブラムシ類、鱗翅目害虫 病害 害虫 オオタバコガ 雑草	
その他の留意事項	<ol style="list-style-type: none"> 8 マルハナバチ利用技術（県） 9 循環ファン利用技術（県） 		（別添一覧表） （別添一覧表）
	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(103) プバルディア

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。 土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		<p>堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する）</p> <p>緑肥全量鋤込み （鋤込む時期に応じた生育量を確保する）</p>
化学肥料施用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 局所施肥技術（省令） 根圏への局所施肥を行い施肥量を低減する。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		<p>化学肥料由来窒素成分量 1 6 kg/10a以下 (1 8 kg/10a以下)</p>
	<p>(県独自技術)</p> <ol style="list-style-type: none"> 4 灌水同時施肥技術（県） 		
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	<ol style="list-style-type: none"> 1 機械除草技術（省令） 2 対抗植物利用技術（省令） 3 熱利用土壌消毒技術（省令） ①太陽熱利用土壌消毒技術 ②熱水・蒸気土壌消毒技術 4 光利用技術（省令） ①反射資材利用技術 ②色彩粘着トラップ技術 5 被覆栽培技術（省令） ①雨よけ栽培技術 ②防虫ネット利用技術 6 フェロモン剤利用技術（省令） 7 マルチ栽培技術（省令） 	<p>害虫 ネコブセンチュウ 線虫類</p> <p>アザミヤ、アブラムシ アザミヤ、アブラムシ</p> <p>病害 害虫 オオタバコガ 雑草</p>	
	<p>(県独自技術)</p> <ol style="list-style-type: none"> 8 循環ファン利用技術（県） 	(別添一覧表)	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。 その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

5 工芸作物

(104) 茶

茶における土づくりは、土壌診断に基づいた肥培管理の徹底を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラ、野草等の粗大有機物の投入によって地力を維持・増進する。

施肥については、灌注施肥による局所施肥や肥効調節型肥料、有機質肥料の利用によって化学肥料使用量の削減を図る。

化学農薬の使用量低減については、病虫害発生予察に基づいた適期防除を行うことを基本とし、さらに低減を図るために天敵やフェロモン剤利用による防除技術を導入する。

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥や稲ワラ、野草等の粗大有機物を施用する。		堆きゅう肥 2 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 粗大有機物 乾物重 500kg/10a以上
化学肥料施用量の低減技術	1 局所施肥技術（省令） 灌注施肥などの根圏局所施肥を行う。 2 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料等による施肥量と施肥回数の低減。 3 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。		化学肥料由来窒素成分量 3.9 kg/10a以下 （4.5 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病虫害名	
	1 機械除草技術（省令） 2 生物農薬利用技術（省令） 3 光利用技術（省令） ①黄色蛍光灯利用技術 4 被覆栽培技術（省令） ①防虫ネット利用技術 5 フェロモン剤利用技術（省令） 6 マルチ栽培技術（省令）	害虫 鱗翅目害虫 鱗翅目害虫 害虫 鱗翅目害虫 雑草	殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 3 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 殺虫剤 1 回削減 除草剤 1 回削減
	（県独自技術） 7 浅刈整枝技術（県） （深刈整枝技術）	（別添一覧表）	（別添一覧表）
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・「化学肥料施用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 ・「機械除草技術」は、ほ場周辺（畦畔）の機械除草を示す。 		

(105) いぐさ

いぐさにおける土づくりについては、作土深の確保や透水性の改良など土壌物理性の改善と輪作体系を基本として、堆きゅう肥の施用や稲ワラの還元、緑肥栽培の導入等によって地力を維持・増進する。施肥については、肥効調節型肥料や有機質肥料の利用によって化学肥料使用量の削減を図る。化学農薬の使用量低減については、深水栽培技術の導入によって殺虫剤使用量の削減を行う。

技術区分	持続性の高い農業生産方式の内容		使用の目安
堆肥等、有機物資材の施用技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 土壌診断に基づいた堆きゅう肥等の投入（省令） 土壌診断を実施し、土壌の状態に応じた堆きゅう肥等の施用を行う。 2 稲ワラの鋤込み（省令） 稲ワラ全量を鋤込む。稲ワラは土壌中の腐熟化を促進するため、いぐさ移植前に2回以上の耕起を実施するか、または還元状態を避けるため、排水溝等を設置して水管理を徹底する。 3 緑肥作物利用技術（省令） 休耕期間中に緑肥作物を栽培し土壌に鋤込む。土壌診断に基づいた緑肥の適正利用を行う。 		堆きゅう肥 1 t/10a以上 （土壌状態、堆きゅう肥の品質を考慮する） 稲ワラ全量鋤込み 緑肥全量鋤込み
化学肥料使用量の低減技術	<ol style="list-style-type: none"> 1 肥効調節型肥料施用技術（省令） 緩効性肥料による施肥量と施肥回数の低減。 2 有機質肥料施用技術（省令） 有機質肥料を主体とした施肥体系を取り入れる。 		化学肥料由来窒素成分量 3.4 kg/10a以下 （3.9 kg/10a以下）
化学農薬使用量の低減技術	導入する個別技術	対象病害虫名	
	（県独自技術） 1 深水栽培技術（県）	イグサシロムシガ	
その他の留意事項	<ul style="list-style-type: none"> ・堆きゅう肥に含まれる成分を考慮した施肥設計を行う。 ・堆きゅう肥使用の目安は木質混合堆肥（牛ふん尿）の例を示した。その他の堆きゅう肥については「各作物別の堆きゅう肥施用基準」に準じる施用量とする。 ・十分な作土深を確保するとともに、土壌の排水性改善に留意する。 ・「化学肥料使用量の低減技術」の（ ）内の数字は「肥効調節型肥料の施用」を選択した場合の化学肥料由来窒素成分量。 		

第2 持続性の高い農業生産方式の導入の促進を図るための措置に関する事項

1 土壌診断の実施

土づくりに基づいた持続性の高い農業を導入するうえで、土壌診断結果に基づいた堆きゅう肥などの有機質資材の施用及び化学肥料の使用量低減が不可欠である。

このため、各農業普及・振興課においては土壌診断室を整備し、農業者の依頼に応えることができる体制が整っている。また、農協の営農センター等の土壌診断施設においても農業普及・振興課との連携を図りつつ、土壌診断を行う体制が整備されてきている。

このため、持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、このような土壌診断体制の積極的な活用を図るとともに、有機物資材の種類や施用量の決定等に関し、普及指導員や農協営農指導員から土壌診断結果や使用する資材の分析データを基にしたアドバイスをうけ、科学的な土づくりによる地力の増進と施肥の合理化に努めることとする。

2 合理的な施肥の実践

局所施肥や肥効調節型肥料、有機質肥料の使用にあたっては、施肥法や肥料の特徴を正しく理解するとともに、地域の気象条件、対象作物の吸肥特性に合った資材の選択と施肥量・施肥時期の決定を行う必要がある。

持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、地域の耕種基準を参考とするとともに農業普及・振興課や農協等を通してこれらの情報を十分に活用し、作物の収量・品質レベルを低下させることがないような合理的施肥を実践することが必要である。

3 発生予察に基づく的確な防除の実施

持続性の高い農業生産方式の円滑な実施のためには、農業者自らが要防除水準を適切に設定できるよう病害虫防除所等から精度の高い予察情報の提供が前提となる。このためには予察精度をさらに向上させるとともに、これらの情報が迅速かつ的確に伝達されるような体制を整備する必要がある。

持続性の高い農業生産方式の導入を図る農業者においては、このような発生予察情報を有効に活用するとともに、病害虫の発消長に基づく生物農薬等による効果的な防除の実施に関しては、普及指導員、病害虫防除所職員等による巡回指導を活用するなどして、導入時期等の適切なアドバイスを受けることが重要である。

エコファーマー認定において熊本県が独自に認める技術の対象病虫害、使用の目安

導入する個別技術	対象病虫害	使用の目安
深水栽培技術	イグサシウムシガ	殺虫剤 1 回削減
マルハナバチ利用技術		植物生長調整剤 5 回削減
移植栽培技術	雑草、土壌病原菌	土壌消毒 1 回削減
循環ファン利用技術	灰色かび病、葉かび病	殺菌剤 1 回削減
浅刈整枝技術 (深刈整枝技術)	炭そ病、チャノミドリヒメヨコバイ、 チャノキイロアザミウマ	殺菌剤 1 回以上削減 殺虫剤 1 回以上削減